



撮影：松元 絵里子

よりよい組織づくりが
よりよい人材を育てる。
チームで動く連帯感が
成果を生み出します。

15年正月の箱根駅伝で、私たち
青山学院大学陸上競技部が青学史
上初の優勝を遂げてからというも
の、私は人生で最高の“モチ期”を迎
えました(笑)。新聞や雑誌、テレビ
出演、講演会など、様々なメディア
で発言の機会をいただけてきまし
たが、その場でも度々語ってきたの
は、「私は、陸上界の人間ではなく、
営業マンの原晋だ」ということ。一
介の営業マンだった私が、監督就任
当時、弱小チームだった青学陸上
競技部を優勝へ導くことができた
のは、営業マン時代に培ったノウハ
ウによるところが大きかったです。
そのプロセスについては過去のイン
タビューや著書で語り尽くしていま
すので詳細はそちらに譲るとして、
今日は『かがやき』の読者の皆さん
と同じ教育機関で指導に携わる者
として、“監督としてチームを率い
ること”に的を絞ってお話してみたい
と思います。

どの業界でも同じかと思いが
が、本当にこの子は頑張れるのか”
という根っこの部分を理解してあげ
ることが重要ですね。もちろん
根が本当に悪い子は叱りとばさな
いといけないですよ。でも、なぜ反
発したり悪ぶったりするのかとい
う原因を突き詰めると、社会や大
人に対して欲求や不満があること
が多いんです。問題意識のある子こ
そ、いろいろなアイデアを持っている
る素晴らしいヤツだ”と指導者が
認めて、能力を引き出してやるこ
とが大事だと思います。ただイエス
マンでいるだけでは、指導者を超え
る発想は出てこないですよ。

今という時代は、何か問題が起
けると、すぐに叩かれてしまうとい
う非常に厳しい時代です。でも問
題にフタをせず、どう訓練すれば
クリアできるかを真っ正面から考
えて立ち向かわないといけない。そ
んな世の中で生き抜くためには、
とにかく強くわがままであること
ですよ。そして、“未来を予言する
力”が大事です。15年は、映画『バツ
クトウザフューチャー』でタイムス
リップした年ということで、30年ぶ
りに話題になりましたが、あの映
画に描かれた世界で、今現実になっ
ていることも少なくない。“予言す

とにかく強くわがままであること、
そして、“未来を予言する力”が大事です

る力”を養うには、イメージネーショ
ンという想像力と、クリエイティブ
な創造力という二つのソウゾウ力
が必要です。そしてもう一つはリス
クに対する“責任をとる”という覚
悟。ソウゾウ力と責任感が新しいも
のを生み出す原動力になります。枠
にはめる躰こしではプロフェッショナル
は生まれません。やはり昔の陸上
選手のように、型破りなまでの躍動
感、見る人を魅了しますからね。

せるために、スタッフでチームをど
う動かすか、それぞれの役割を明
確にすると、ポテンシャルを十分に
発揮できるベストなフォーメーショ
ンでチーム運営できるようになる。
部員たちのなかでもキャプテン、副
キャプテン、会計係と役割がいろい
ろあります。チーム制で、各自に責
任ある役割を持たせることが、選
手としてはもちろん、人間性を高
めることにもつながっています。“よ
りよい組織づくりがよりよい人材
を育てる”が私の信条です。組織を
きちんと運営しないと、決していい
人材は育ちません。学校でも一人の
教員で束ねられることには限界が
ありますよね。チーム運営するよ
うな組織づくりが、教育の現場に
は必要だと思います。

また、“俺たちはチームなんだ”
という連帯感も成果を生み出しま
す。学校でも1組、2組という単な
るナンバリングではなく、自分たち
で考えたオリジナルのチーム名を
考えるとチームの一体感を味わえ
るんじゃないかな。
私が営業マン時代から変わらず
続けている手法のひとつに、具体的
な目標をキャッチコピーにして目に
見えるよう掲げることがあります。
今年のテーマや次のレースの目標、

